八朔祭屋台シリーズ3

八朔祭屋台は、江戸時代後期に、谷村の下町、新町、仲町、早馬町の四町で製作され、その特色は、装飾として彫刻などを多用せずに、飾幕によって屋台美を構成しているところにあるといわれています。今回は、この飾幕について紹介したいと思います。

飾幕には、屋台の後部を飾る後幕、正面上部を飾る水引幕、正面下部を飾る泥幕、楽屋を飾る中幕などがあり、各町に現存しているものは次のとおりです。

（各町の屋台飾幕）

下町　後幕「虎」
　水引幕「しめ縄」
　泥幕「蛟」
　中幕「三番叟」

新町　後幕「鹿島踊り」
　水引幕「龍」

仲町　後幕「桜に駒」
　泥幕「真鯉」

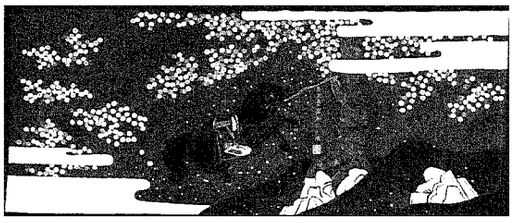
早馬町　後幕
　「牧童牛の背に笛を吹く」
　水引幕「百足」
　中幕「野馬群像」

現存する飾幕の内、下町の後幕「虎」には「東陽画狂人北斎」、仲町の後幕「桜に駒」には「鳥文斎藤原栄之」、早馬町の中幕「野馬群像」には「南柳斎文朝」の落款が認められます。

これらは、葛飾北斎、藤原栄之、柳文朝という江戸時代を代表する有名な絵師の落款であり、彼らによって「虎」や「桜に駒」は下絵が、「野馬群像」は墨彩による肉筆が、それぞれ描かれたことを示しています。

早馬町の屋台に飾られる後幕　「牧童牛の背に笛を吹く」

下町屋台後幕　「虎」



仲町屋台後幕　「桜に駒」

新町屋台後幕　「鹿島踊り」

当地域は、江戸時代、郡内絹の産地として有名でした。特に、「郡内縞」と呼ばれる縞物は、井原西鶴の作品などにも認められ、江戸市中において広く愛用されたと言われています。

谷村は、その中心地であり、越後屋、大丸屋、白木屋など江戸の大きな呉服屋が直接出店を構えるなど、江戸と密接な土地柄でした。

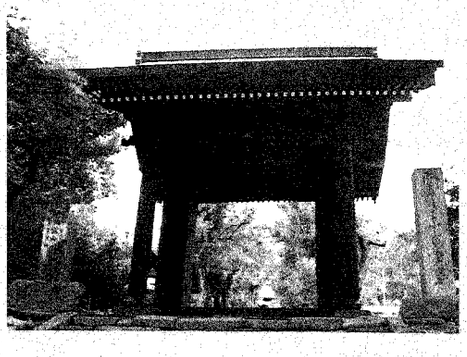
江戸時代を代表する絵師によって下絵が描かれ、貴重であった舶来の緋ラシャ地に、金糸、銀糸の刺繍がふんだんに使用されたこれらの飾幕は、往時の谷村の経済力とともに、祭りによせる心意気が感じられます。

社会教育課文化振興係

「長生寺の中雀門」「早馬町屋台泥幕　百足」

都留市有形文化財に指定

「長生寺の中雀門」



長生寺は古くから歴代領主の菩提寺として信仰を集めてきた寺院で、このことを物語るように現在も多くの文化財が伝えられています。

今回市有形文化財に指定された中雀門は、谷村城主であった鳥居元忠が寄進したといわれ、蟇股と呼ばれる屋根の妻下部分に鳥居家の家紋である「竹に雀」が巧みに彫られています。

様式は一間一戸の四脚門で、典型的な禅宗様式を踏んでおり、竹に雀、鯉の滝昇り、牡丹などの凝った彫刻が施されています。また、妻を飾る懸魚は梅鉢で、市内唯一の様式です。平成八年の改修に際しても、旧形を忠実に再現し、近世中期の建築様式を今に伝える貴重な文化遺産です。

「早馬町屋台泥幕　百足」

早馬町屋台には、楽屋三方を囲むように飾られた後幕、その内側に掛けられた中幕、舞台正面上部を彩った水引幕、また、その下部を彩った泥幕が現存しています。これらの内、後幕・水引幕は既に市有形文化財に指定されています。

この「百足」は、「瀬田」とも呼ばれ、有名な田原藤太の百足退治を題材として、緋ラシャ地に金糸などによって瀬田の唐橋と百足が豪華に刺しゅうされています。製作年代は屋台の創建年代と同じ文化文政と推定されます。多彩な装飾を持ち、美術的にも、歴史的にも非常に価値のある、都留市を代表する貴重な文化遺産です。